日本キリスト教団
三軒茶屋教会

三軒茶屋
教会通り

第9号　2000年9月発行

〒154-0024
東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5
TEL／FAX:(03)3418-4933
編集／発行:広報部

わが国の教会を問いつつ

牧師　陣内厚生

二千年の節目ということは、私たちにさまざまな感慨を与えてくれます。一般のメディアでも「二〇世紀最後の…」といった表現が多く、少なくとも「時」や「時代」を考えるきっかけとなっているようです。

わが教会では、この機会に「日本宣教を顧みる教会史講座」と銘うって、日本におけるキリスト教宣教の歴史を学ぶ取り組みを続けてきました。日本の教会は、カトリック伝来から四五〇年、プロテスタントは一四〇年の歴史をもっています。キリスト教二千年の歴史のうち、ごく一部の歳月を経たにすぎませんが、しかし私たちのスケールからすれば、日本の教会は、自らの歴史への責任を担うべき十分な時代を経過したと言わねばなりません。

さて、二〇世紀の教会を顧みるとき、まず明治中期から後期にかかる時代の、教会の状況を見る必要があります。政府の進める「富国強兵・殖産興業」策は、日本の資本主義の急速な発展を促し、いわゆる「産業革命」をもたらしましたが、一九〇一（明治三十四）年以来、キリスト教会もまた、活発な「二〇世紀大挙伝道」を展開し、教会と信徒数が急増しました。しかしその反面、大きな地すべり現象が生じたのです。教会は資本主義とともに増加した中産インテリ階級及び学生層を獲得したものの、農民及び資本制的な搾取下にある労働階級を引き入れることができませんでした。教会がその基盤とした中産インテリは、プロテスタントの信仰を小市民的生活に留め、社会に対して積極的に責任を負うことを回避するに至りました。

このようにして、キリスト教会は天皇制と資本主義体制に包括され、日清・日露の両戦争を通じ、自らが決して反国家的、反社会的存在ではないことを実証するため、戦争に奉仕し、国家体制に忠実な姿勢をとり続けるのです。一九一二（明治四十五）年政府の要請とは言え、神道、仏教とともに「皇運を扶翼し、国民道徳の振興を計らん事」を決議した三教会同は、天皇制体制の擁護に一層踏み込んだものとなりました。

他方で、キリスト教の中には、このような妥協を許さず、福音的信仰の純粋性を求め、批判的良心を堅持したキリスト者も決して少なくはありません。これら教会主義的方向、個人主義的方向、社会主義的方向のいずれもある所まではよいものの、同時に、現実的対応については不十分であり、教会の闘いには耐えられませんでした。ここにその後今日に至る日本のキリスト教会の悲劇が潜んでいたと言えましょう。

以上見てきたように、二〇世紀の日本の教会は、その初頭から問題を内包し続けてきました。「教会史講座」の中で、あの太平洋戦争時の、国家にからめ取られた教会の姿に大きな衝撃波を受けた私たちは、教会の歴史を担う者として、神の前に真実の信仰のあり方、教会のあり方を問われる思いがいたします。激動の二〇世紀という海に、未だ教会は小舟のごとく揺れ動いていますが、私たちにはその中心に泰然として主キリストがいまし給うことを、再確認すべきではないでしょうか。